

研究員からのメッセージ

CEL設立40周年に際し、研究員がそれぞれの立場から、これまでの歩みと今後への思いを綴ります。生活者の視点をもって、実践と研究の現場で積み重ねてきた経験を糧に、CELは、これからも問いと向き合っていきます。



『生活者』という言葉に込められているもの



山納 洋
Yamanashi Hiroshi
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所所長代理・研究員。1993年、大阪ガス㈱入社。神戸アートビレッジセンター（現・新開地アートひろば）、扇町ミュージアムスクエアなどの企画・プロデュース業務を歴任。2010年より近畿圏部にて地域活性化、社会貢献事業に携わったのち、23年より現職。

『CEL』58号（2001年9月発行）の特集「生活者再考」では、お茶の水女子大学名誉教授で社会学者の故・天野正子氏に論考を寄せていただいていた。天野氏はその中で、1980年代から90年代にかけてバズワードになっていた『生活者』という言葉が、どのような状況のもとで、どのような問題や関心を担って登場してきたのかを明らかにしている。この言葉の内には「暮らし方」「対抗性」「共同性」への志向が込められており、「消費者」という枠に閉じ込められた現代人のありようを問い直す視点となり得る。生きる現場と乖離することなく、日常性を変える実践を積み重ねていくことこそが、『生活者』の本分である。私たちはなぜ『生活文化』を研究し続けてきたのか、そしてこれから何を問うていくのか。今回この特集号をまとめるにあたって発見したこの言葉の深みを胸に、さらなる研究と実践を進めていきたいと考えている。

生活者と文化の視点で問い、現場に根差した研究を



弘本由香里
Hiramoto Yukari
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所研究員。1992年から大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所（CEL）研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組み。共編著に『コミュニティ・デザイン新論』（さいはて社）など。

日本の住宅の近代化と戦後復興期を駆けた『新住宅』という住宅建築専門誌があった。バブル崩壊とともに廃刊に至るまでの数年間、私は編集員を務めた。その縁がきっかけで、思いがけないCELでの研究員人生がスタートしたのだが、それは畢竟、近代化や戦後復興を、生活者の眼で問い直すことにもつながっていった。

もうひとつの転機が、1995年の阪神・淡路大震災だった。避難先の大阪市内に住まいを移し、大阪市民となって大阪市内住まい情報センターや大阪くらしの今昔館の開設に関わる道を選んだ。目指したのは、市民と専門家等の協働による都市居住文化の再生。それらの経験から、NEXT21が立地する上町台地界隈での、コミュニティ・デザインの協働的実践研究が生まれ、今、次世代へのリレーも視野に入ってきた。テーマはフィールドにあり、領域や属性を横断し、新たな方法論を探る。それこそ、CELならではの使命だと改めて思う。

街の記憶を掘り起こし、伝え今に繋ぐという実践



栗本智代
Kurimoto Tomoyo
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所研究員。1988年大阪ガス㈱入社後、91年より現職。94年より、関西の活性化を目指す取り組みの一環として、わがまちの歴史・文化やエピソードを、語りや映像と音楽による独自の手法でわかりやすく伝える「語りベシアター」公演活動を展開。

関西、中でも大阪の街には数多の歴史や文化があるが、伝承力が弱く街の記憶が失われつつある。それらを掘り起こし、地域の魅力創出へ活かしたいとこれまで活動を重ねてきたが、同様の問題意識を持つ社外の方々の助けが不可欠であった。まだ若輩の頃、研究会を立ち上げた際も、大学の先生や他社のリサーチャーなどみな快く知恵と汗を提供してくれたのは、CELへの信頼が基盤にあったからだと感じている。発信手法のひとつとして「語りベシアター」の公演を展開しているが、2019年9月に実施したシンガポール公演は、貴重な経験であった。異国のお客さまに大変好評をいただき、大きな自信につながった。実現に向け多くの関係者に尽力いただき、励まされてとても心強かったことを思い出す。改めて御礼を申し上げたい。今後も、街や「場」づくりを担う方々と新たなタッグを組みながら、CELならではの視座を活かして摸索と発信を続けていきたい。

40年の歩みを受け継ぎ、次の時代へと歴史を紡ぐ



小西久美子
Konishi Kuniko
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所研究員。1991年、大阪ガス㈱入社。家庭用エネルギー部門で直営業、技術提案を経験後、地域開発関連部署で社有地開発・都市開発に関する業務に従事。その間、民間テレポート、URに Outreach 都市再生事業などを経験。技術士（建設部門・都市及び地方計画）、一級建築士。

私がCELに入ったのは2022年4月、まもなく丸4年になる。以前よりCELの存在は知っていたが、文化的でアカデミックな組織という印象で、まさか、自分が『そちら側』に行くとは思ってもみなかった。実際、入ってみると、文化的でアカデミックで専門的であることは確かだが、理論だけでなく「生活者目線」の「実践」を重んじていることを強く感じている。

今回、歴代所長や研究員に話を聞く機会を多く得たが、この研究スタイルこそが設立当初から目指してきたもので、長い歴史の中で成果を積み重ねてきたことを、改めて認識した。「過去は作れない」。ある元所長の言葉であるが、CELが40年間積み重ねてきたものの意義もそこにあると感じた。脈々と受け継がれてきた40年という糸の中で、私はまだ「点」にもなっていないが、歴史を紡いでいく役割だけはしっかり担っていきたい。過去にとどまることなく、歴史の中に未来の種を見つけていけたらと思う。